

## 『 うちに来てくれてありがとう 』



40代で中高一貫校の校長に就任した私は、たった二ヶ月で身体を壊してしまいました。それまでも校長の仕事はほぼ代行していましたが、自分の後ろに誰もいないという責任の重さは、まるで、昨日まで歩いていた平均台の高さがいきなり100メートルになったような感覚でした。

そんなとき、知人から「保護猫をもらってくれないか」と相談があり、預けてある動物病院にいきました。兄弟の中でかわいい子からもらわれていったそうで、最後に残った一匹でした。ケージを覗き、目が合った瞬間、ガラスを内側からトントンとたたいてきました。「僕だよ」と私に合図をしているように見えました。



キジトラで次男（たぶん）なので、夫が寅次と名付けました。臆病で、最初はソファの下や棚の上に隠れて、いるのかいないのか分からないような子でしたが、半年くらいすると、トイレにまでついてくるようになりました。

その後、同じ人から、「寅ちゃんには兄弟が必要よ」と言われ、保護したという猫を見にいきました。先住犬に尻尾を噛まれている瞬間に出くわし、思わず抱いて帰りました。



ちょうど庭の梅が綺麗な季節だったので、梅子と名付けました。反応が薄いので、不思議に思っていたら、耳が聞こえない子でした。そのせいか、いつもビクビクしてなかなか慣れず、初めのうちは、寅次に追い回されていました。

そして数ヶ月、寅が梅をグルーミングしたり、食事のときには耳の聞こえない梅子を呼びに行ったりと面倒をみるようになりました。あるとき、シャンプーを嫌がる梅子の絶叫を聞いて、寅が風呂場のドアに体当たりして助けようとしたのには驚きました。



いつも二匹でくっついて小さなタワーにきゅっと収まっている姿は見るだけで癒やされました。

そんなある日、私が修学旅行の引率から帰ってくると寅次がいません。急病で入院手術されたとのことで、慌てて病院に行くと、「町医者には初めてのケースで失敗してしまった。今は

薬で炎症を抑えている」といわれ、血の気が引きました。友人から「命のことは取り返しがつかないから遠慮してはだめ」と言われ、つてをたどって名医を探し、再手術でなんとか命を取り留めました。その後は「長生きしてね」が口癖になりました。

そして、寅次が来てから15年くらいたったときでした。私はがんを発症し、一年に二回の手術をすることになりました。一回目の手術を終え、ようやく日常生活ができるようになったころ、今度は寅次ががんになってしまいました。できる限りの手を尽くし、一時は立ち上がれなかった子が玄関まで迎えに来るまで回復し、獣医さんから「奇跡の子ですね」と言われるほど、生きようと頑張っていました。最期は静かに私の傍らで息を引き取りました。

振り返ると、仕事が一番厳しいときにやってきて、いつもそばで支えてくれていました。私が病気になったときは、悩む間を与えないようにしてくれたのかなあという気さえます。猫も一匹一匹性格が違い、それぞれに違った出会いがあり、何らかの意味ある縁で結ばれていることを感じます。彼がいなくなって、しばらくは涙が止まりませんでした。が、今は、「猫たちも私たちも幸せ」そんな日々を過ごせた縁に心から感謝しています。

品川女子学院  
理事長 漆 紫穂子

漆 紫穂子